HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第６章　フィンランドのサーミ・メディアの現状と利用状況
Author(s)	小内, 純子
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 34, 137-155
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61381
Type	bulletin (article)
File Information	600_ch6.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第６章　フィンランドのサーミ・メディアの現状と利用状況

小内　純子　札幌学院大学社会情報学部教授

はじめに

これまでスウェーデン、ノルウェーの先住民族･サーミを対象に、先住民族メディアの調査を行ってきた（小内　2013, 2015a, 2015b）。サーミの居住地は、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北部からロシアのコラ（Kola）半島にかけて広く分布している。サーミの人々の間ではそこにサーミ共同体の構築を目指す動きがあり、「この過程でメディアは中心的な役割を果たしてきた」（Pietikäinen 2008a：199）と評価されている。しかし、その一方で、サーミの居住地は、それぞれ国境で分断されており、サーミ・メディアはそれぞれが属する国のメディア政策や制度の枠内で活動せざるをえず、かつ各国の経済力の影響も避けられない状況にある。スウェーデンやノルウェーの調査でもその点は明確に現れており、同じサーミではあるが、スウェーデンとノルウェーでは所有するサーミ・メディアもその利用状況も大きく異なっていた。

今回の対象はフィンランドのサーミである。フィンランドの実態も当然これまでの２つの国と大きく異なることが予想される。とくに、次の２つの点がサーミ・メディアのありように与える影響は大きいと考えられる。１つは人口規模である。サーミの人口は、ノルウェー（50,000 ～ 65,000 人）、スウェーデン（20,000 ～ 40,000 人）に比較して、フィンランドは約 9,000 人と少ない。人口が少なければ、当然読者やオーディエンスも少なく、そのことがサーミ・メディアの存立基盤を脆弱なものにするからである。実際、フィンランドにおけるサーミ・メディアの数は少ない。

２つ目はサーミ語の方言の違いである。サーミ語には 10 の方言が存在している。北サーミ語が多い点は北欧３国に共通しているが、北サーミ語の次に多いのが、スウェーデンやノルウェーでは南サーミ語とルレ･サーミ語であるのに対して、フィンランドではイナリ･サーミ語とスコルト･サーミ語となっている。したがって、フィンランドでは使用言語の点でも、他の２国とは異なる対応をとらざるをえないことになる。サーミ語の多様性がメディアに与える影響は大きい。

写真６－１　“Anarâš”

写真６－２　“The Tuõddri Pee´rel”

以上の点に留意しつつ、以下では、まずフィンランドのサーミ・メディアの形成過程と現状について把握し、そのうえでサーミの人々のメディア利用状況と情報発信について見ていく。

第１節　　活字メディアの歴史と現状

活字メディアが非常に少ない点がフィンランドのサーミ・メディアの１つの特徴である。現状では国内で定期的に発行されているサーミの新聞や雑誌はなく、文化財団などが発行する機関誌（冊子）がある程度である。

フィンランドにも、2001 年までは“Sápmelaś（= Sámi)”という北サーミ語で書かれた新聞（冊子)が存在していた。“Sápmelaś”の創刊は 1934 年と早い。1932 年に設立されたサーミ文化協会が、サーミの文化的な向上を目指して発行したものである。ただし発行責任者はサーミではなく、ヘルシンキ大学の言語学の教授であった。1990 年代まではずっと財政問題と格闘してきており、発行が年１回か２回ということも多かったようである（Solbakk 2006：213)。その後、国やサーミ議会の助成金を受けて 2001 年までは発行されていたが、発行責任者の交替の際にトラブルが生じて廃刊になってしまったという[1)]。

活字メディアとしてはこの他に、イナリ･サーミ語協会の機関誌として発行される冊子“Anarâš”（“イナリの人々”という意味、写真６－１）とスコルト・サーミ文化財団が年１回発行している冊子“The Tuõddri Pee´rel”（「トゥドリ〈丘陵地帯の名称〉の真珠」という意味、写真６－２）が存在している。いずれもＡ４判カラー刷りで、写真がふんだんに使われており、会員には無料で配布されている。

“Anarâš”は 1998 年から年４回定期的に刊行されている 35 頁程度の季刊誌で、イナリ・サーミ語のみで書かれている。このほかにイナリ・サーミ語のカレンダーも雑誌のナンバーとして発行している。一方、“The Tuõddri Pee´rel”は 2013 年から年１回発行されている 50 頁程度の冊子である。スコルト・サーミ語とフィンランド語で書かれており、スコルト・サーミ語の再興のために近年発行されるようになったものである。内容は、両機関誌とも、それぞれのサーミ社会に関する今昔のトピックス、小説、子ども向け話、子どもの絵や話、詩、国内外のルポなどから構成されている。

また、サーミ･メディアではないが、ロヴァニエミで発行されている世界最北の地方日刊紙“Lapin

写真６－３“Lapin kansa”

写真６－４　“Lapin kansa”内の北サーミ語の記事

kansa”の一部にサーミ語の記事が掲載されている。“Lapin kansa”は、1928年に創刊されたフィンランド語の新聞で、発行部数は約2万8千部（2014年）、ラッピ県の15自治体をカバーしている。写真6－3は“Lapin kansa”の1面、写真6－4は紙面の一部に掲載されている北サーミ語の記事である。記事数は少ないが、こうした一般の日刊紙を通じて北サーミ語にふれることはできる。

第2節　放送メディアの歴史と現状

このような活字メディアの状況もあって、フィンランドにおけるサーミ・メディアの中心は、放送メディアである。放送メディアに関しては、ラジオに始まり、テレビが加わり、さらにインターネットという媒体も加わり多様化してきている。ノルウェーとスウェーデンと同様に、フィンランドのラジオやテレビはフィンランド公共放送Yleの1部門として放送を行っている。ここでは、YleのＨＰに掲載されている“History of Yle Sápmi”と“Yle Sápmi Today”、および2014年8月にイナリのYle Sápmi放送局で実施したインタビュー結果を中心に、フィンランドにおける放送メディアの歴史と現状について見ていく。

第1項　放送メディアの形成過程

ラジオ放送は初期の段階からフィンランド公共放送Yleと密接な関係を持ってスタートしている。Yleで最初のサーミ語のラジオ放送が行われたのは1946年秋のことであり、翌年にはサーミ語の定期放送が始まっている。サーミ語のニュースは月曜日の7時15分から30分まで、オウルから中波で行われた。サーミ語の最初の宗教番組は1948年2月1日にオウルの教会から放送され、その後1960年まで毎月最初の日曜日に教会から放送された。この間、ニュースと宗教番組がサーミ番組の2つの柱だった。

1960年代初めにラジオ局はオウルからロヴァニエミへ移動した。その方がサーミ地域で広く聞くことができるうえ、サーミの編集者が地域新聞にアクセスしやすいという理由からである。当時はYleが地域の番組制作を再編している時期であり、その過程でロヴァニエミはラップランド地方の放送の中心地になっていた。また、この頃から次第に宗教番組は少なくなり、ついには終了している。その一方でサーミ語の放送時間は長くなり、それに合わせてYleはサーミ番組のためのスタッフの充実をはかった。1966年には北欧三国の協力がスタートし、9月には平日毎朝5分間のニュース放送が共同で行われるようになった。1968年10月にサーミ語の30分番組が始まり、放送は新しい段階に入る。番組名は“Sámi ságat”で、ニュースだけではなく、インタビュー、音楽、文化イベントなど幅広い内容から構成されるようになる。

1960年代はサーミの民族としての自尊心が高まる時期であり、Yleにおいても独立した地位の獲得に向う動きがでてきた。当時は、サーミ・ラジオはYleにおいて独立した位置にはなく、ラップランド地方ラジオ局（Yleの地方局）の1部門であった。Yle放送局内にも、サーミラジオ局の自立を支持してくれるフィンランド人のスタッフもいた。1973年夏過ぎにサーミ放送局はロヴァニエミからイナリに移動し、それを契機にラップランド地方ラジオ局から独立し、Yle内において公式に独立した地位を与えられた。サーミ・ラジオは1977年に自分たちの建物を得、その後1987年に現在の建物が完成している（写真6－5）。その間、1983年にウツヨキとエノンテキオに支局ができた。

第２項　組織・運営体制

現在、イナリの放送局のほか、ウツヨキとエノンテキオに支局が存在している。支局では常勤ではなくフリーランスの人が働いており、ヘルシンキの Yle にもフリーランサーが駐在している。ロヴァニエミにあるラップランド地方ラジオとは協力関係にある。先述したようにサーミ・ラジオ局はもともとこの地方ラジオ局の１部門であった。ラップランド地方ラジオ局は現在も Yle の地方局の１つで、サーミ語の放送はないが、ラップランド地方の情報を取材して流している。

写真６－５ 現在の放送局の建物

写真６－６ テレビスタジオ

ラジオ局とテレビ局は Yle Sápmi として一緒に運営されており、組織上は分かれていない。Yle Sápmi 全体で 22 人の常勤スタッフと約 15 人のフリーランサーが雇用されている。常勤のスタッフは、男性７人、女性 15 人、ほとんどがサーミで、サーミでないのは３人のみである。方言は、４人がスコルト・サーミ語、２人がイナリ・サーミ語、残りが北サーミ語となっている。サーミ語がしゃべれないのは１人だけである。カメラマンやパソコン上で編集作業をする人は必ずしもサーミ語は必要とされないが、できた方がプラスになることはいうまでもない。

第３項　財源

Yle Sápmi は、Yle の１部門であるから財源は Yle から予算を配分される。公共放送 Yle の運営財源はかつて受信料制度にもとづいて行われていたが、2013 年１月１日から公共放送税（Yle 税）に切り替わった[2)]。テレビ受信機でリアルタイムにテレビを視聴する人が減少し、インターネット経由の見逃しサービスなどを利用する人が増えている中で、財源の安定をはかるためというのが主な理由である。実際、2011 年から 2012 年にかけてテレビ番組をリアルタイムで視聴する国民は 84％から 80％に減っている（NHK 放送文化研究所編　2014:186）。公共放送税の徴収は国税局によって行うが、国庫ではなく国家ラジオ基金に納められる。

公共放送税は、個人と事業所から徴収されており、2013 年の公共放送税収入は総額５億ユーロ（約 600 億円）で、これを財源として公共放送が行われている（NHK 放送文化研究所編　2015：184）。したがって、Yle 内部で配分をめぐるせめぎ合いはあるが、自らが営業を行って財源を確保するという状況にはない。

第４項　2013 ～ 2015 年の Yle サーミの戦略的な目標

Yle では 2013 ～ 2015 年にかけて新経営計画を定めているが、それと対応するかたちで Yle Sápmi でも以下の様な４つの戦略的な目標を掲げている。

①すべてのサーミに対して、幅広く、質が高く、最新でかつ重要な話題や内容を適切な手法で提供すること。

②信頼性があり、大胆で素早く、サーミの視点を通じて、自立した立場から問題を提起し展開する存在であること。

③サーミ語、文化、そしてアイデンティティを強固なものにする存在であること。

④サーミ地域のメディアとして最も優秀で、一番人気のある職場であること。

なかでも、２つ目のサーミの視点を通じて自立した立場から問題を提起することに大きな使命を感じている。たとえば、フィンランドでは林業関係の組織、林野庁が国の森を売ったりしているが、そのことに対してトナカイを飼っているサーミの人たちは勝手に森を切られては困ると主張している。森がある地域の土地と水はサーミがずっと使ってきたものだからである。林野庁が行っていることがサーミの人たちの視点から見た場合にはどうなのかという点をテーマに取り上げて放送することが重要であると考えている。

第５項　可聴エリアと放送内容

⑴　ラジオ放送

Yle Sápmi のラジオ放送は全国放送ではなく、南はロヴァニエミまでのフィンランドの北部、すなわちラップランド地方を可聴エリアとしている。ただし、インターネットラジオを介してどこでも聞くことは可能である。

Sami Radio という専用チャンネルで、月曜日から金曜日までの５日間に、サーミ語の放送は１日約７時間放送される。土日の放送はないため、週 35 時間の放送である。午前３～４時間、午後３～４時間放送されるが、６～８月までのバカンスの時期は午前の放送はない。うち北欧３国での放送は週８時間程度である。

表６－１は、水曜日と木曜日のタイムテーブルを示したものである。タイムテーブルの特徴は以下の点である。

①平日の７時 29 分～９時 34 分に、「ニュース、おはようサーミランド」という番組が北サーミ語で放送されている。

②12 時 10 分～ 14 時 00 分の「“やあ！ “」という情報･文化番組では、火曜日にイナリ･サーミ語、水曜日にスコルト･サーミ語、月曜日と木曜日と金曜日に北サーミ語での放送が行われている。

③16 時 00 分～ 17 時 00 分は「SR ラジオ・サーミ」というスウェーデンのサーミ放送が、17 時 00 分～ 18 時 30 分は「NRK サーミ」というノルウェーのサーミ放送が、それぞれ北サーミ語で放送されている。

④「Binna bánna(ピンナ・パンナ)」という子ども向け番組が週１回、月曜日の 13 時～ 14 時に放送され、水曜日は朝９時から再放送されている。この番組では北サーミ語、スコルト・サーミ語、イナリ・サーミ語が話されている。

⑤「Sohkaršohkka (砂糖ショック)」という若い世代向け番組が毎週木曜日の 17 時 30 分から 20

時まで放送されている。その週の最新の話題や情報とサーミ音楽が３つのサーミ語で発信される。

⑥その他の時間帯にはフィンランド語のニュースや生活情報番組が放送されている。

以上のように、放送全体では北サーミ語の番組が多いが、他の２つの方言にも配慮して放送が行われている。北サーミ語中心の番組でもずっと北サーミ語が流れるのではなく、番組の中に必要に応じて他のサーミ語も入ってくる。たとえば、スコルト･サーミのところで取材をするとスコルト･サーミ語でそのまま流す。音楽でもヨイクであればその地方のサーミ語で紹介するようにしている。

後述するようにテレビ番組がニュース中心なのに比べると、ラジオ放送は放送内容の幅は広い。ニュース、音楽、子どもの番組、若者向け番組、時事問題など多岐にわたる。音楽はヨイクなどサーミの音楽が中心だが、最近は若いサーミも多くなっているのでヨイクを今風にアレンジした曲なども流している。70％がサーミの音楽で、残り 30％はこの地域の近くの伝統的なフォークソングのような音楽を流す。他の国の先住民族の人たちの音楽も流したりもしている。

表６－１　サーミ・ラジオのタイムテーブル（水曜日と木曜日）

2015年10月28日（水曜日）
08：35　おはようサーミランド
10：00　Yleニュース
10：03　リアルライム
11：00　Yleニュース
12：09　Nuorttsäämas（＊スコルト・サーミ語のラジオ番組）
13：00　音の貯蔵庫（＊スコルト・サーミ語のアーカイブ番組）
14：00　Yleニュース
14：03　リアルライム
15：00　Yleニュース
15：05　こんにちはラップランド
15：30　Yleニュースラップランド
15：35　こんにちはラップランド
16：00　SRラジオ・サーミ（＊スウェーデン）
17：00　NRKサーミ（＊ノルウェー）

2015年10月29日（木曜日）
07：29　Yleニュース・サーミ
07：36　おはようサーミランド
08：29　Yleニュース・サーミランド
08：35　おはようサーミランド
09：34　おはようラップランド
10：00　Yleニュース
10：03　リアルライム
12：00　Yleニュースと天気
12：10　やあ！（＊北サー語）
13：00　祈りの言葉と音楽
14：00　Yleニュース
14：03　リアルライム
15：00　Yleニュース
15：05　こんにちはラップランド
15：30　Yleニュース・ラップランド
15：35　こんにちはラップランド
16：00　SRラジオ・サーミ（＊スウェーデンの放送、北サーミ語）
17：00　NRKサーミ（＊ノルウェーの放送、北サーミ語）
17：30　砂糖ショック（＊若い世代の成人向け番組）

注）実線は北サーミ語の番組、波線はスコルト・サーミ語の番組を示す
資料：YLEのＨＰより作成。

⑵　テレビ放送

テレビの方は全国放送である。テレビのニュースは２つのチャンネルで１日合わせて 20 分、週５日間放送される。その他に 2014 年９月７日から１週間に一度 15 分の子ども番組“Unna Junná”が始まるので、その分長くなり、１週間の放送時間は 115 分である。子ども番組は再放送があるのでそれを入れると週 130 分となる。

サーミのニュース番組は 2002 年にスタートする。これは北欧３国共通の 15 分のニュース番組で、フィンランドでは、チャンネル YLE Fem で 20 時 45 分から 21 時までの 15 分間放送されている。また、これとは別に 2013 年 12 月からテレビ YLE TV1 で 15 時 10 分から５分間のニュースがスタートしている。これはフィンランドだけの放送である。YLE Fem のニュースが“Ođđasat（ニュースという意味）”、YLE TV1 のニュースが“Yle Ođđasat”という番組名である。フィンランド独自の５分間のニュースを始めた理由は、フィンランドのサーミの人にできるだけサーミのことを知ってもらいたいからだという。その背景には方言の問題が潜んでいる。

表６－２は YLE のテレビチャンネルと放送内容を示したものである。“Ođđasat”が流れる YLE Fem は全国放送ではあるが、スウェーデン語の放送なので見る人が少ない。たとえば、2013 年のテレビ視聴率シェアでは（表６－３）、YLE Fem は YLE Teema と合わせても 3.8％を占めるにすぎない。一方、“Yle Ođđasat”が放送されている YLE TV1 は、ニュース、時事、ドキュメンタリーが主な放送内容で、視聴率シェアは 29.7％と最も高く、よく見られているチャンネルである。YLE TV1 でサーミ語のニュースを流した方が、多くの人に見てもらう可能性が大きくなるのは当然である。北欧３国共通のニュース番組“Ođđasat ”が視聴率が低い YLE Fem で放送されるようになったいきさつについてはわからないが、1996 年に、フィンランドのサーミ議会が「３つのサーミ語すべてが等しく機能すべきである」と決定したことと関係しているように思われる。“Ođđasat”の最終的な編集権はノルウェーの放送局が持っており、必ずしもフィンランドのサーミが興味を持つ内容とはなっていない上に、番組は北サーミ語が中心で、イナリ・サーミ語やスコルト・サーミ語はほとんど使われないからである。“Yle Ođđasat”では、テレビでニュースを読む人は北サーミ語を使っていても、ニュースの内容がスコルト・サーミのものだったりするとスコルト・サーミ語で流しフィンランド語の字幕をつけて放送される。

表６－２　YLEのテレビチャンネルと放送内容

YLE TV1：ニュース、時事・ドキュメンタリー
YLE TV2：ヤング・アダルト向け娯楽
YLE Fem：スウェーデン語の総合編成
YLE Teema：文化、教養

出典：NHK放送文化研究所編『ＮHKデータブック世界の放送2015』ＮＨＫ出版，2015年, p.184.

表６－３　テレビの視聴率シェア

チャンネル	シェア（%）
YLE TV1	20.7
YLE TV2	15.6
YLE Fem/YLE Teama	3.8
MTV3	11.6
Nelonen	6.6
SubTV	4.8
その他	27.9

注：MTV３以下は公共放送以外
出典：Finnpannel Oy
ただし表６－２の文献より転載

また、子ども番組“Unna Junná”でも３つの方言が使われ、それにフィンランド語の字幕がつけられる。日曜日の朝７時 45 分と８時 15 分（再放送）から 15 分間の放送で、同じ番組を違うチャ

ンネルで２回放送する。なお、この番組は、財源の問題もあり、いつまで続くのかはっきりしない状況であるという。クリスマス前までに 15 回の放送が予定されている。夏までにさらに 15 回をやり全部で 30 回放送する計画であるが、クリスマス以降については、実際どうなるのか調査時点ではわからないということであった。

⑶“The Tuõddri Pee´rel”の記事より

以上のように放送メディアは、３つの方言をできるだけ使うように心掛けており、実際にその成果が現れていることは次のような雑誌の記事からもわかる。以下は、スコルト・サーミ文化財団の機関紙“The Tuõddri Pee´rel”の 2014 年版の 36 ～ 37 頁に掲載されている「Yle サーミでスコルト・サーミ語を聴いたり目にする機会は増え続けている」という記事を訳したものである。そこからは近年のフィンランドのサーミ・メディアをめぐる状況の一端をうかがい知ることができる。

「近年、スコルト・サーミ語は Yle Sápmi で扱われる機会がどんどん増えてきている。テレビでは 2013 年２月 12 日より、イナリから全国に向けて“Yle Ođđasat”ニュースが平日には毎日放送され、またスコルト･サーミ語も多くの番組で、ほぼ毎週聴くことができる。以前のサーミ語ニュース放送では､スコルト･サーミ語による話題は年に数件のみであったが､今では“Yle Ođđasat”ニュース放送ではこの３ヵ月の間にすでに 10 件のスコルト・サーミ語の放送があり、そのうち更に半数はスコルト・サーミの人たちで編成されたチームによる放送であった。そうした前進はラジオ部門でも見られ、スコルト・サーミ語の割合は 2012 年には 8%、2013 年には 1% 増加した。2014 年に対しては、少なくとも 10% の成長が期待されている。というのも毎週の“Säämas”という番組の他にも、今年の始めからはスコルト・サーミ語のナレーションが入った最新の話題を扱う番組が週に１回放送されているからだ。

昨年、ラジオにおけるスコルト・サーミ語の割合は“Säähharšokk”という若者向け番組によって増加した。番組ではフィンランドで話されている３つのサーミ語すべてを聴くことができる。これらすべてのサーミ語は子ども向けのテレビ番組“Unna Junná ”でも聴くことができ、スコルト・サーミ語の挿入画に加えて、スコルト・サーミ語が番組を案内する言語のひとつとして登場している。昨年 Yle Sápmi ではサーミ語によるインターネット・ニュース放送に力を入れてきた。そして夏からは www.yle.fi/sapmi というサイトでスコルト・サーミ語のニュースを読むこともできる。」

このように近年テレビやラジオでスコルト・サーミ語に接する機会が増えてきていることがわかる。スコルト・サーミ語の話者は 270 ～ 280 人と少なく、消滅の危機にあるサーミ語方言の１つである。北サーミ語とイナリ・サーミ語は似ており、お互いにコミュニケーション可能な言語であるのに対して、スコルト・サーミ語はロシア語の影響も受けており、他の２つとはかなり異なる言語であることもこうした状況に拍車をかけている。それでも消滅をなんとか食いとめ、復興させようとしている努力が、サーミ・メディアにおける言語使用の状況から見てとることができ、そうした試みが成果をあげている現状も垣間見ることができた。

第３節　サーミ・メディアの現状と課題

以上、フィンランドのサーミ・メディアの形成過程と現状について見てきた。ここでその特徴についてまとめておく。

第１に、フィンランドの場合、定期的に発行されている新聞や雑誌がないという点があげられる。ノルウェーには新聞２誌、宗教的冊子１誌、若者向け雑誌１誌などが存在し、スウェーデンには、月刊雑誌１誌、若者向け雑誌１誌があったが、フィンランドには協会の機関誌程度しか存在しなかった。序章で見たような戦前の複雑な歴史が活字メディアを育てる土壌を奪ったのかもしれない。さらに、ノルウェーの新聞の編集者が、「新聞は政府の補助金なしには成り立たない」と話してくれたことを考えると、現在フィンランドでは国からの援助があまり期待できないとも思われる。十分な補助金を引き出せない要因の１つとして、サーミ総数が 9,000 人と少ないということも関係していると考えられる。ただし、他の２つの国で発行されている雑誌や新聞を購読することは可能である。どの程度のサーミが他国で発行されている新聞や雑誌を購読しているかは、次節で見てみたい。

第２に、北欧３国の協力関係についてである。Pietikäinen, S. は、彼女の調査研究のなかで、「ニュース制作の方法、ジャーナリズムの実践、資金力の違いは、３つの国の編集局が一緒に仕事をすることをかなり難しくしている。サーミ・メディアが属している各国公共放送会社は、ニュースのイデオロギーが異なっており、これらの違いはサーミのジャーナリズム実践に徐々に行き渡っている。」というフィンランドのサーミ・メディア関係者の声を紹介している（Pietikäinen 2008a, 2008b）。しかし、今回の調査では放送メディアの関係者からあまりそうした意見を聞くことはなかった。その理由の１つは、2013 年 12 月から北欧３国共同のニュース番組とは別に、フィンランド独自の５分間のニュース番組の枠を確保できたことが大きく影響しているように思われる。これによりフィンランドのニュース、とくにイナリ・サーミやスコルト・サーミに関するニュースを、その方言で放送できることになり、ある程度矛盾が解消されたと考えられる。

第３に、フィンランドもまた放送メディアは公共放送の一部門に位置づけられている点である。そのため財政的には安定した基盤の上に放送業務を遂行できる条件が保障されている。また、公共放送の内部にあることによって「報道の自由」が制限されるようなこともなく、この点もスウェーデンやノルウェーと同様であった。ただし、課題がないわけではない。１つは、予算の分配は Yle 内部において競争の面もあり、たとえば 2014 年に新たにスタートした週１回の子ども番組がこの先も継続できるかははっきりわからないということである。言語の再興にとって子どもの情報環境を整えることは重要と考えられているだけに、大きな課題と意識されていた。２つ目は、人材確保の問題である。とくに話者が少ないスコルト・サーミの人材を継続して確保していくことが将来的な課題としてあげられた。現在は、たまたま確保されているが、放送するコンテンツを作成できる専門性を備えた人材を確保することはそれほど容易なことではないだけに、Yle Sápmi 自身が人材養成に取り組むことも必要であると思われる。

第４節　サーミ・メディアの利用状況と情報発信

第１項　調査対象者の概要

さて、以上フィンランドにおけるサーミ・メディアの存在状況について見てきた。本節では、それをふまえてサーミの人々がこれらをどの程度利用しているかについて考察していく。対象とする

のは、これまで各章で分析してきた全ケース 76 で、内訳は、イナリ中学校生徒４人、イナリ小中学校教員５人、イナリ小中学校保護者 11 人、サーミ教育専門学校学生 42 人、サーミ教育専門学校教員 14 人である。調査は 2015 年８月の現地調査で協力を依頼し、帰国後にインターネットを使って実施した。表６－４は、対象者の男女別構成を示したものである。全体では、男性 26.0％、女性 74.0％と、４分の３を女性が占めている。とくに保護者 11 名は全員女性で、イナリ中学校生徒が男女半々以外は、圧倒的に女性の回答者が多い。

年齢別では、イナリ中学校生徒は全員 10 代、サーミ教育専門学校の学生は 10 代から 30 代が中心で 40 代もおり年齢層の幅が広い（表６－５）。教員はイナリ小中学校教員が 20 ～ 40 代、サーミ教育専門学校教員が 30 ～ 60 代で、前者の方が相対的に若い層が多くなっている。保護者は 30 ～ 50 代である。全体的には、50 代と 60 代が合わせて９％を占め、残りは 10 ～ 40 代の４つの年齢階梯にほぼ均等に分布している。

使用可能なサーミ語を見たのが表６－６である。サーミ語が使える人が 84.7％で、方言別には北サーミ語が 78.0％、イナリ・サーミ語が 23.7％、その他が 3.4％で、スコルト・サーミ語ができる人は今回の調査では皆無であった。また、２つの方言を話せる人が 12 人（20.3％）いるが、うち 11 人は北サーミ語とイナリ･サーミ語の組み合わせである。北サーミ語とイナリ･サーミ語はコミュニケーションが可能と言われており、比較的共通する部分もあるためと思われる。属性別には、イナリ中学校生徒と保護者は全員北サーミ語が利用可能で、うちイナリ・サーミ語も利用可能という人が５割を占めている。教員やサーミ教育専門学校学生のなかには、サーミ語が利用できない人が２割程度存在している。ノルウェーの調査では、サーミ語利用可能比率が 96.7％であったことと比べると、利用できない人の比率が高い。

表６－４　調査対象者の性別

	実　数（人）			比　率（％）		
	男	女	計	男	女	計
イナリ中学校生徒	2	2	4	50.0	50.0	100.0
サーミ教育専門学校学生	12	28	40	30.0	70.0	100.0
生徒・学生計	14	30	44	31.8	68.2	100.0
イナリ小中学校教員	1	4	5	20.0	80.0	100.0
サーミ教育専門学校教員	4	9	13	30.8	69.2	100.0
教員計	5	13	18	27.8	72.2	100.0
保護者計	0	11	11	0.0	100.0	100.0
総計	19	54	73	26.0	74.0	100.0

注）有効回答＝73
資料：実態調査より作成

表６－５　調査対象者の年齢

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
実数・人	イナリ中学校生徒	4	0	0	0	0	0	4
	サーミ教育専門学校学生	11	14	8	3	0	0	36
	生徒・学生計	15	14	8	3	0	0	40
	イナリ小中学校教員	0	1	1	2	0	1	5
	サーミ教育専門学校教員	0	0	2	5	2	2	11
	教員計	0	1	3	7	2	3	16
	保護者計	0	0	4	6	1	0	11
	総計	15	15	15	16	3	3	67
比率・%	イナリ中学校生徒	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	サーミ教育専門学校学生	30.6	38.9	22.2	8.3	0.0	0.0	100.0
	生徒・学生計	37.5	35.0	20.0	7.5	0.0	0.0	100.0
	イナリ小中学校教員	0.0	20.0	20.0	40.0	0.0	20.0	100.0
	サーミ教育専門学校教員	0.0	0.0	18.2	45.5	18.2	18.2	100.0
	教員計	0.0	6.3	18.8	43.8	12.5	18.8	100.0
	保護者計	0.0	0.0	36.4	54.5	9.1	0.0	100.0
	総計	22.4	22.4	22.4	23.9	4.5	4.5	100.0

注）有効回答＝67
資料：実態調査より作成

表６－６　使えるサーミ語について

		北サーミ語	イナリ・サーミ語	スコルト・サーミ語	その他	使えない	回答者数	北サーミ+イナリ	北サーミ+その他
実数・人	イナリ中学校生徒	4	2	0	0	0	4	2	0
	サーミ教育専門学校学生	21	5	0	2	6	30	3	1
	生徒・学生計	25	7	0	2	6	34	5	1
	イナリ小中学校教員	2	1	0	0	1	4	0	0
	サーミ教育専門学校教員	10	1	0	0	2	12	1	0
	教員計	12	2	0	0	3	16	1	0
	保護者計	9	5	0	0	0	9	5	0
	総計	46	14	0	2	9	59	11	1
比率・%	イナリ中学校生徒	100.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100.0	50.0	0.0
	サーミ教育専門学校学生	70.0	16.7	0.0	6.7	20.0	100.0	10.0	3.3
	生徒・学生計	73.5	20.6	0.0	5.9	17.6	100.0	14.7	2.9
	イナリ小中学校教員	50.0	25.0	0.0	0.0	25.0	100.0	0.0	0.0
	サーミ教育専門学校教員	83.3	8.3	0.0	0.0	16.7	100.0	8.3	0.0
	教員計	75.0	12.5	0.0	0.0	18.8	100.0	6.3	0.0
	保護者計	100.0	55.6	0.0	0.0	0.0	100.0	55.6	0.0
	総計	78.0	23.7	0.0	3.4	15.3	100.0	18.6	1.7

注）有効回答＝59
資料：実態調査より作成

第２項　利用状況

属性別にサーミ・メディアの利用状況を見たのが表６－７である。まず、全体の傾向を確認しておくと、最も利用率が高いのがYleサーミ・ラジオの番組とYLE TV1のニュース番組で、それぞれ46.6％と約半数の人が利用している。ついでYLE Femのニュース番組（32.9％）が続く。先にYLE Femは全国的には視聴率が低いチャンネルであることを指摘したが、サーミの人たちの間では思ったより利用されている結果となった。ついでテレビの子ども番組が23.3％と続き、やはり放送メディアの利用が多くなっている。活字メディアでは、一般紙に掲載されているサーミ語の記事が13.7％と一番高くなっており、ノルウェーやスウェーデンで発行されている新聞や雑誌を利用す

る人は少ないという結果になった。活字メディアは、なかなか３国共通で利用する状況にはなっていないことがわかる。また、「その他」をあげた人が６人いるが、そのうち４人は、“YLE Sápmi nettiuutiset”や“Yle Sápmi sosiaalinen media”といったYleのネットニュースやツイッターなどSNSの利用で、こうした媒体の利用も進んでいることが覗える。他にはイナリ・サーミ協会の機関誌“Anarâš”をあげた人が１人いた。その一方で、「どれも利用していない」という人も21.9%存在し、５人に１人を占める結果となった。

属性別には、ほとんどのメディアで、保護者やサーミ教育専門学校教員の利用率が高くなっている。なかでも保護者は、各放送メディアでまんべんなく利用率が高い。それに対してサーミ教育専門学校学生は二極化が顕著で、YLE TV1（46.2%）とYleサーミ・ラジオ（35.9%）の利用率が高い一方で、「どれも利用していない」という人が35.9%と他に比べてダントツで高くなっている。カイ二乗検定の結果を見ると属性と利用状況の間に明確な有意差はなく、「Yleサーミ・ラジオ番組」と「どれも利用していない」という項目で緩やかな有意差が見られるにとどまった。

表６－８は性別とサーミ・メディアの利用状況を示したものである。テレビの子ども番組やYLE Femのニュースは女性の方が利用しており、「どれも利用していない」は男性に多いといった傾向は見られるが、カイ二乗検定の結果では、いずれも男女間でメディア利用に有意な差は確認できなかった。

ついで年齢層とサーミ・メディアの利用状況について見てみた（表６－９）。10代、20，30代、40代以上に分けて見た場合、「YLEサーミ・ラジオの番組」と「その他のメディア」および「どれも利用していない」で、カイ二乗検定結果に緩やかな有意差が見られた。前の２つは年齢層が上になるほど利用率が高まる傾向を示している。この結果から、ラジオや「その他メディア」で多かったYleのネットニュースやツイッターなどSNSの利用は40歳以上でよく利用されていることがわかる。アクセスが容易なテレビは年齢を問わず一定数の利用者があるのに対し、ラジオやネットはサーミ関連の情報に関心が高い40代以上層の利用者が多いことを意味していると考えられる。その一方で、「どれも利用していない」というものは10代で42.9%と高い比率になっている。

表６－７　属性別サーミ・メディアの利用状況

単位：%

	イナリ中学校生徒	サーミ教育専門学校学生	イナリ小中学校教員	サーミ教育専門学校教員	保護者	全体	p
1. YLEサーミ・ラジオの番組	50.0	35.9	20.0	71.4	63.6	46.6	<.1
2. ウェブラジオ（YLE Sápmi）の番組	0.0	12.8	20.0	14.3	45.5	17.8	n.s.
3. テレビのYLE Femのサーミ語の番組（Ođđasat）	50.0	28.2	20.0	35.7	45.5	32.9	n.s.
4. テレビのYLE TV１のサーミ語の番組（Yle Ođđasat）	25.0	46.2	40.0	50.0	54.5	46.6	n.s.
5. テレビのサーミ語の子ども番組（Unna Junná）	25.0	15.4	40.0	21.4	45.5	23.3	n.s.
6. 一般の新聞に掲載されているサーミ語の記事	0.0	12.8	20.0	0.0	36.4	13.7	<.1
7. Avvir	25.0	7.7	20.0	7.1	9.1	9.6	n.s.
8. Samefolket	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
9. Š	0.0	5.1	20.0	7.1	0.0	5.5	n.s.
10. Nuorat	0.0	5.1	0.0	0.0	0.0	2.7	n.s.
11. その他	0.0	0.0	40.0	14.3	18.2	8.2	<.1
12. どれも利用していない	0.0	35.9	0.0	7.1	9.1	21.9	<.1
回答者	4	39	5	14	11	73	

注）有効回答＝73
資料：実態調査より作成

表６－８　性別サーミ・メディアの利用状況

	男	女	計	p
1. YLEサーミ・ラジオの番組	52.6	44.2	46.5	n.s.
2. ウェブラジオ（YLE Sápmi）の番組	10.5	19.2	16.9	n.s.
3. テレビのYLE Femのサーミ語の番組（Ođđasat）	26.3	36.5	33.8	n.s.
4. テレビのYLE TV1のサーミ語の番組（Yle Ođđasat）	47.4	46.2	46.5	n.s.
5. テレビのサーミ語の子ども番組（Unna Junná）	15.8	26.9	23.9	n.s.
6. 一般の新聞に掲載されているサーミ語の記事	10.5	15.4	14.1	n.s.
7. Avvir	15.8	7.7	9.9	n.s.
8. Samefolket	0.0	0.0	0.0	
9. Š	10.5	3.8	5.6	n.s.
10. Nuorat	5.3	1.9	2.8	n.s.
11. その他	10.5	7.7	8.5	n.s.
12. どれも利用していない	31.6	19.2	22.5	n.s.
回答者	19	52	71	

注）有効回答＝71
資料：実態調査より作成

表６－９　年齢層別サーミ・メディアの利用程度

	10代	20,30代	40代以上	計	p
1. YLEサーミ・ラジオの番組	21.4	46.7	59.1	45.5	＜.1
2. ウェブラジオ（YLE Sápmi）の番組	7.1	20.0	18.2	16.4	n.s.
3. テレビのYLE Femのサーミ語の番組（Ođđasat）	28.6	40.0	31.8	34.8	n.s.
4. テレビのYLE TV1のサーミ語の番組（Yle Ođđasat）	28.6	53.3	50.0	47.0	n.s.
5. テレビのサーミ語の子ども番組（Unna Junná）	14.3	30.0	22.7	24.2	n.s.
6. 一般の新聞に掲載されているサーミ語の記事	21.4	13.3	9.1	13.6	n.s.
7. Avvir	14.3	10.0	0.0	7.6	n.s.
8. Samefolket	0	0	0	0	
9. Š	7.1	6.7	4.5	6.1	n.s.
10. Nuorat	7.1	3.3	0.0	3.0	n.s.
11. その他	0.0	3.3	22.7	9.1	＜.05
12. どれも利用していない	42.9	23.3	9.1	22.7	＜.1
回答者	14	30	22	66	

注）有効回答＝66
資料：実態調査より作成

第３項　利用程度

次に、サーミ・メディアの利用程度を、利用しているサーミ・メディアの数から見てみた。11のサーミ・メディアの選択肢のなかから５個以上を選んだ人を利用程度の高い人（「高」）、３，４個選んだ人を「中」、１，２個選んだ人を「低」とした。それと属性をクロスしたのが表６－10である。全体では、「高」が12.3％、「中」が16.4％、「低」が50.7％、「利用しない」が20.5％となっている。属性とのクロス結果をカイ二乗検定すると$p<.001$水準で有意差が見られた。実際、保護者は「高」と「低」に二極化、イナリ小中学校教員とサーミ教育専門学校教員はともに「中」か「低」、サーミ教育専門学校学生は「低」か「利用しない」、イナリ中学生は「低」という明確な特徴が見られた。

表６－11は利用程度を性別に、表６－12は年齢層別に見たものである。いずれも、カイ二乗検定結果に有意差は見られなかった。また、「サーミかどうか」という点も検討してみたが（表６－13）、「サーミかどうか」とメディアの利用程度に関しても有意差は確認できなかった。したがって、サーミ・メディアの利用程度は、とくに属性との関係が強いことが明らかとなった。

表６－10　属性別サーミ・メディアの利用程度

	イナリ中学校生徒	サーミ教育専門学校学生	イナリ小中学校教員	サーミ教育専門学校教員	保護者	全体
高	0	4	0	0	5	9
	0.0	10.3	0.0	0.0	45.5	12.3
中	0	3	2	7	0	12
	0.0	7.7	40.0	50.0	0.0	16.4
低	4	19	3	6	5	37
	100.0	48.7	60.0	42.9	45.5	50.7
利用しない	0	13	0	1	1	15
	0.0	33.3	0.0	7.1	9.1	20.5
計	4	39	5	14	11	73
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注）利用程度　高＝５個以上、中＝３，４個、　低＝１，２個　NA＝３人、ｐ＜.001
資料：実態調査より作成

表６－11　性別サーミ・メディアの利用程度

	男	女	計
高	2	7	9
	10.5	13.5	12.7
中	3	9	12
	15.8	17.3	16.9
低	9	26	35
	47.4	50.0	49.3
利用しない	5	10	15
	26.3	19.2	21.1
計	19	52	71
	100.0	100.0	100.0

注）利用程度　高＝５個以上、中＝３，４個、
　　低＝１，２個　NA＝５人、ｐ＜.n.s.
資料：実態調査より作成

表６－12　年齢層別サーミ・メディアの利用程度

	10代	20,30代	40代以上	計
高	1	5	2	8
	7.1	16.7	9.1	12.1
中	1	4	6	11
	7.1	13.3	27.3	16.7
低	7	14	12	33
	50.0	45.7	54.5	50.0
利用しない	5	7	2	14
	35.7	23.3	9.1	21.2
計	14	30	22	66
	100.0	100.0	100.0	100.0

注）利用程度　高＝５個以上、中＝３，４個、
　　低＝１，２個　NA=10人、ｐ＜.n.s.
資料：実態調査より作成

表６－13　サーミかどうか×サーミ・メディアの利用程度

	サーミである	サーミでない	わからない	計
高	5	4	0	9
	15.5	10.5	0.0	12.3
中	6	5	1	12
	18.8	13.2	33.3	16.4
低	16	19	2	37
	50.0	50.0	66.7	50.7
利用しない	5	10	0	15
	15.6	26.3	0.0	20.5
計	32	38	3	73
	100.0	100.0	100.0	100.0

注）利用程度　高＝５個以上、中＝３，４個、　低＝１，２個
　　NA＝３人、ｐ＜.n.s.
資料：実態調査より作成

第４項　情報発信

それでは外部に対する情報発信の現状についてはどのように評価しているのであろうか。「サーミ自身によるサーミ以外の人に対する、メディアやイベントなどを通じた情報発信は十分に行われ

ていると思うか」という質問をしている。ただし、この質問はイナリ中学校生徒には行っていない。表６－14はその結果を属性別に示したものである。全体的には、「まったく不十分である」と評価している人が9.4％で、「あまり行われていない」40.6％と合わせると50.0％の人が否定的に評価している。逆に、「十分に行われている」が6.3％、「まあまあ行われている」が29.7％で肯定的な回答した人は36.0％となっている。属性別には、否定的な回答をした人の比率は、サーミ教育専門学校学生37.8％＜保護者50.0％＜教師が76.5％の順で高くなっている。サーミ・メディアの利用率は保護者の方が高かったが、情報発信に対する評価は教員の方が厳しいという結果になった。

情報発信への評価を性別に見たのが表６－15、年齢層別に見たのが表６－16である。やはり性別には有意な差は見られなかった。年齢層別には、年齢層が高くなるほど否定的な評価をする人が多くなる。「まったく不十分である」と「あまり行われていない」という人の比率は、10代が20.0％、20，30代が50.0％、40代以上が60.0％となっている。カイ二乗検定からｐ＜.01水準で有意差が確認できた。ついで利用程度別に情報発信への評価も見てみたが、この点に関しては有意な差は確認できなかった（表６－17）。

表６－14　属性別情報発信への評価

利用程度	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
サーミ教育専門学校学生	4	11	9	5	8	37
	10.8	29.7	24.3	13.5	21.6	100.0
イナリ小中学校教員	0	0	4	1	0	5
	0.0	0.0	80.0	20.0	0.0	100.0
サーミ教育専門学校教員	0	4	8	0	0	12
	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0
保護者	0	4	5	0	1	10
	0.0	40.0	50.0	0.0	10.0	100.0
計	4	19	26	6	9	64
	6.3	29.7	40.6	9.4	14.1	100.0

注）NA＝12　p＜.1
資料：実態調査より作成

表６－15　性別情報発信への評価

利用程度	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
男	2	16	18	5	6	47
	4.3	34.0	38.3	10.6	12.8	100.0
女	2	3	7	1	3	16
	12.5	18.8	43.8	6.3	18.8	100.0
計	4	19	25	6	9	63
	6.3	30.2	39.7	9.5	14.3	100.0

注）NA＝13　p＝n.s.
実態調査より作成

表６－16　年齢層別情報発信への評価

利用程度	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
10代	1	2	1	1	5	10
	10.0	20.0	10.0	10.0	50.0	100.0
20，30代	2	10	9	5	2	28
	7.1	35.7	32.1	17.9	7.1	100.0
40代以上	0	7	12	0	1	20
	0.0	35.0	60.0	0.0	5.0	100.0
計	3	19	22	6	8	58
	5.2	32.8	37.9	10.3	13.8	100.0

注）NA＝18　p＜.01
資料：実態調査より作成

表６－17　利用程度別情報発信への評価

利用程度	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
高	1	4	2	0	1	8
	12.5	50.0	25.0	1.0	12.5	100.0
中	0	2	5	2	1	10
	0.0	20.0	50.0	20.0	10.0	100.0
低	1	11	15	2	3	32
	3.1	34.4	46.9	6.3	9.4	100.0
利用しない	2	2	4	2	4	14
	14.3	14.3	28.6	14.3	28.6	100.0
計	4	19	26	6	9	64
	6.3	29.7	40.6	9.4	14.1	100.0

注）NA＝12　p＝n.s.
資料：実態調査より作成

第５項　小　括

以上、メディアの利用状況と情報発信に対する評価を見てきた。フィンランドには、定期的に発行されている新聞や雑誌といった活字メディアがないため、利用はラジオやテレビなど放送メディアが中心となっていた。ノルウェーやスウェーデンで発行されているサーミ語の新聞や雑誌も購読可能であるが、購読者はきわめて少数で、活字メディアは放送メディアに比べると国境で利用が閉じられている傾向が見られた。政府から助成金を得ていることもあり、コンテンツが自国関連のもの中心になっていることが関係していると思われる。

サーミ・メディアを利用している人は属性との関連が強かった。保護者や教員の利用率が高く、サーミ教育専門学校学生は利用率が高い者と低い者に二極化している傾向が見られた。性別間では顕著な違いは見られず、年齢的には、10代、20，30代、40代以上の順で利用率が高くなっていた。

利用程度「高」「中」「低」も属性との間で有意差が見られた。保護者の利用率は相対的に高いが、利用程度で見ると利用程度が高い人と低い人に二極化する傾向がある。教員は「中」か「低」、サーミ教育専門学校学生は「低」か「利用しない」、イナリ中学校生徒は「低」となっている。やはりサーミ教育専門学校学生や中学校生徒の利用程度は相対的に低く、この層へのアプローチは今後の課題といえよう。

外部への情報発信という点では、ノルウェーやスウェーデンで一般的に見られた「メディアの利

用率が高い人ほど外部への情報発信について厳しい見方をしている」という傾向は、フィンランドでは確認できなかった。それぞれの調査方法が異なるので単純な比較はできないが、フィンランドの特徴として注目する必要はあろう。ノルウェーとスウェーデンでは約２割の人が、外部への情報発信が「まったく不十分である」と回答しているが、フィンランドは9.4％にとどまった。フィンランドには活字メディアが少ないことと関係があるのかもしれない。

その一方で、メディアの利用度は保護者の方が教師よりも高いが、情報発信に対する否定的な回答は教師の方が高いという傾向は、ノルウェーでも同様に指摘できた。やはり教師は、現実をより厳しい目で評価している傾向があるようだ。

おわりに　―公共放送とサーミ・メディア―

以上、フィンランドのサーミ・メディアの現状とその利用状況について見てきた。その特徴点については、すでにそれぞれまとめているので繰り返すことはしない。

ここでは、最後に公共放送とサーミ・メディアの問題に焦点を当ててみたい。これまで2012年から2015年にかけてスウェーデン、ノルウェー、フィンランドと、北欧３国のサーミ・メディアの展開と現状について調査を行ってきた。そのなかでつねに疑問を感じていたことは公共放送の１部門として先住民族メディアが位置づけられていることについての評価であった。この点に関して、伊藤・八幡（2004：3）は、主流メディアにおいて先住民族言語による番組が放送されるケースについても、広義の先住民族メディアと理解するという見解を示しており、本研究でも、基本的に同様の立場で調査を実施してきた。繰り返すまでもなく、３つの国とも、サーミ・ラジオやサーミ・テレビといった放送メディアは公共放送の１部門に位置づけられている。日本でいえばNHKの１部門としてアイヌ放送部門が存在していることを意味している。それゆえ、日本のNHKの現状を考えると（松田　2014)、こうした体制の下で、本当に「報道の自由」は保障されているのかという疑問が、つねに頭の隅に存在し続けた。

もちろん公共放送のあり方は、北欧３国でそれぞれ異なっている。たとえば、NHK放送文化研究所編『NHK　データブック世界の放送2015』には、フィンランドの公共放送Yleの運営状況については以下のように説明されている。「公共放送YLEは、1926年に設立され、1993年12月に成立したYLE法によって、99.9％政府出資の株式会社となった。YLEの企業統治改革が行われ、2007年から最高意志決定機関の管理評議会と業務執行機関で運営されている。業務執行機関は、管理評議会が選出した５人以上８人以下で構成される理事会と会長である。管理評議会は国会が選出した21人の国会議員、YLEの人事部が指名した２人の職員と法務局長によって構成されている。YLEは2013年４月からYLE税で運営され、広告やスポンサーシップは禁止されている。」（NHK放送文化研究所編　2015：184）

YLEが99.9％政府出資の株式会社であること、管理評議会に国会議員の比率が高いこと、YLE税という税金で運営されていることを知るにつけ、フィンランドでは果たして「外部的メディアの自由」や「内部的メディアの自由」が保障されているのかという疑問がますます強くなっていった[3)]。

しかし、今回の調査ではどの国においても関係者から「報道の自由」を脅かされているといった発言を聞くことはなかった。フィンランドでも、Yle Sápmiの関係者へのインタビューの際に、経営者側からの放送内容に対する圧力の有無を尋ねたところ、即座に「そういうことはない」という

返答を得た。ヘルシンキ大学のIrja氏もまた、「フィンランドは、そういう意味では非常に民主的な国で、言語の自由も約束されているので、そういう問題はない」と述べている。

また、ジャーナリストの国際団体である「国境なき記者団」が、各国でどれだけ自由な報道が認められているか分析し、毎年「報道の自由度」ランキングを発表している[4)]。この結果を参考までに見てみると、2015年の「報道の自由度」の第1位は6年連続でフィンランドとなっている。ちなみに第2位がノルウェー、 第5位がスウェーデンと、北欧3国の順位はいずれも高い。

もちろん公共放送の一部門を占めるあり方にまったく問題がないというわけではない。ノルウェーの調査の際には、公共放送NRK内でサーミのテレビ番組の放送時間を拡大することがなかなか困難であるという点が指摘されていた。フィンランドではYLE内での予算配分の問題があげられていた。このようにすべてが自分たちの思い通りにいくわけではないが、「報道の自由」が認められている場合、安定した財源が保障されるこの仕組みは、先住民がメディアを所有する際の1つの理想型を示しているようにも思われる。少なくとも、公共放送こそがこうした「少数者の声」を発信する仕組みを整えるべきであることを改めて考えさせられる結果となった。もちろんそのためには「報道の自由」が保障されていることが必須の条件であることを繰り返し強調しておく必要がある。

注

1）ヘルシンキ大学のIrja氏に対するインタビュー調査（2015年8月22日実施）より。

2）こうした変更は他国でも行われている。たとえば、ドイツでは放送サービスを利用できる受信機が多様化しているなかで、受信機の所有を根拠に受信料を徴収することがますます難しくなり、将来的に公平負担の原則の遵守が危ぶまれるという認識から、2006年10月より放送と通信の融合時代にふさわしい公平な受信料のあり方が検討され、2010年6月に受信機所有の有無にかかわらず、全世帯から一律に「放送負担金」を徴収するという基本方針で合意し、2013年1月から実施に移された（NHK放送文化研究所編　2014：170）。なお、フィンランドに関しては、中村（2012）も参照のこと。

3）「外部的メディアの自由」とはプレス企業の国家への自由を、「内部的メディアの自由」とはプレス企業内部の自由、つまり経営者に対する編集者（記者）の自由を意味している。詳しくは、花田（2013）参照のこと。

4）言論の自由、報道の自由を擁護するために、1985年にパリで設立されたジャーナリストによる国際的な非政府組織で、世界の主要国を中心に130の支部がある。元ラジオ局記者ロベール・メナール(Robert Ménard)が設立の中心人物である。この団体は、2002年以降、『世界報道自由ランキング』(Worldwide press freedom index)を毎年発行している。公式サイトは、http://en.rsf.org/である。また、Robert（2001=2004）も参照のこと。

参考文献

花田達朗編著, 2013,『内部的メディアの自由』日本評論社.

伊藤直哉・八幡耕一, 2004,「先住民族メディアの理論に向けた社会的機能についての考察 ――関連する国際機関の概観とともに――」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科・言語文化

紀要』第 47 号 , 1-26.
松田浩 , 2014,『NHK －危機に立つ公共放送』岩波新書 .
中村美子 , 2012,「フィンランド，テレビ受信料から YLE 税へ変更」NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』2 月号 , 85.
NHK 放送文化研究所編 , 2014,『NHK データブック世界の放送 2014』NHK 出版 .
————, 2015,『NHK データブック世界の放送 2015』NHK 出版 .
小内純子 , 2013,「サーミ・メディアの展開と現段階」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29　ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 146-162.
————, 2015a,「ノルウェーのサーミ・メディアの現状と利用状況」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 32　ノルウェー・フィンマルク地方におけるサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 123-149.
————, 2015b,「サーミ・メディアとメディア利用の現状」野崎剛毅編著『スウェーデン・サーミの生活と意識 ――国際郵送調査からみるサーミの教育、差別、民族・政治意識、メディア――』札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科 , 71-94.
Pietikäinen,S., 2008a, "To breathe two airs: Empowering indigenous Sámi media", in Wilson, P. and Stewart, M. eds., *Global Indigenous Media* (Duke university press), 197-213.
————, 2008b, "Broadcasting Indigenous Voices: Sami Minority Media Production", *European Journal of Communication*, 23（23）, 173-191.
Robert, M., 2001, *Ces journalistes que I'on veut faire taire : L'étonnante aventure de Reporters sans frontīéres*（Paris, ALBIN MICHEL), 大岡優一郎訳 , 2004,『闘うジャーナリストたち　国境なき記者団の挑戦』岩波書店.
Solbakk, J. T., ed., 2006, *The Sámi People – A Handbook*（Davvi Girji OS. ）

インターネット資料

Yle“History of Yle Sápmi”（http://yle.fi/uutiset/history_of_yle_sapmi/6611917　2016 年 1 月 16 日最終閲覧）
Yle“Yle Sápmi Today”（http://yle.fi/uutiset/yle_sapmi_in_english/6611860　2016 年 1 月 16 日最終閲覧）

（小内　純子）